

評伝 矢内原忠雄 (二)

A Critical Biography of YANAIHARA Tadao (Part 2)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第二章 第一高等学校へ

一 進路の決定

神戸中学校は、矢内原忠雄在学中の一九〇七(明治四〇)年四月、兵庫県立第一神戸中学校(略称、神戸一中)と改称されている。そこで以下中学校時代の忠雄に関する記述には、神戸中学校に替えて神戸一中の名称を用いることとする。

神戸一中時代の忠雄は、とにかくよく勉強し、スポーツに励む模範生徒であった。それは勉めてそうするというよりも、自然に彼は神戸一中の校風に順応し、学校が掲げた徳目「質素剛健」「自重自

治」をよしとしたのである。成績はよく、無遅刻・無欠席で通している。神戸一中では、クラスの委員を教師が任命するのではなく、当時としては画期的とも言える選挙で選んだ。忠雄はずっと副組長を務めた。組長は菊名寛一である。年令は忠雄の三歳上で、野球の選手であった。後年菊名は大阪高等医学校(現大阪大学医学部)を出て、精神科の医者となっている。「病氣と人生」¹⁾という論文がある。神戸一中時代の上級生に、川西實三²⁾がいた。彼はのち一高・東大を経て埼玉・長崎・京都・東京の知事を務め、日本赤十字社社長となった。神戸一中では、忠雄の三年上級にあたった。矢内原忠雄が進学の際し、一高第一部甲類を選ぶのは、この川西實三の影響であった。川西の中学時代を忠雄は「中学の五年間」²⁾に、以下のように書く。

二年級になった。今度の五年の組長は川西といふ人であった。自治的な神中^{じんちゆう}に於ては五年の組長は総理大臣の格式があつた。彼は今寺内首相^{しんない}に対するよりは数百倍の厚き尊敬をこの組長に払つて居た。其の落ち着いた大きな身体を運動場の端の柳の下にあらはして眼鏡越しに見渡して居る時など威風四辺を払ふ様に感ぜられた。実にこの人は組長といふ資格と眼鏡を掛けて居る事実だけで彼の尊敬心を惹くに充分であつた。加之或夏の夕方彼は此人が放課後のテニスを終へてから『静思余録』といふ小さい本を読み乍ら悠然と家路に辿つて居るのに会つた。此人は彼の家の下を通つて御影の方迄帰るのであつた。彼は言ひ知れぬ尊敬の情がこみ上げて夏の西日に長く引く此人の後影に見入つて居た。彼にも若し英雄崇拜といふ事があるならば其最初にして且つ最醇なるものであつた。

川西實三は体格にすぐれ、成績優秀な親分肌の人物であつた。スポーツを好み、読書もよくした。彼が読んでいたという「静思余録」は、徳富蘇峰の随筆で、当時の高校生に人気があつた。忠雄の親友大利武祐^{おほしたけすけ}は、川西實三をよく知っており、大利を通し、忠雄は川西と親しくなる。特に川西が一高に入り、長い手紙を寄越すようになつてから、その仲はいっそう深まる。川西實三に「渡し守」³と題した一文があり、中に「中学時代」の小見出しの添えられた箇所がある。これも以下に引用する。

私が矢内原君の存在をはっきり意識したのは、明治三十九年、君が兵庫県立神戸中学校の二年生、私がその五年生の時で

ある。私共の学校は、新渡戸、内村先生と札幌時代の同期生であつた鶴崎校長の許に、一高をお手本に自治と質実剛健を誇りとしておつた。お互に組長として各学年合同の組長^{著者注}、副組長を含む会議を開いて、校風問題を論議した事があつた。小さな痩せ形の坊ちゃんが中々しっかりした意見を述べる。可愛ゆいと同時にえらいなと感じた。

昼休みの時間に、この坊ちゃんとキャッチボールをするのがとても楽しみになつた。明治三十九年六月九日の私の日記に、学校の弁論大会に於ける君の演説の記事がある。司会者の私の呼び上げに応じて壇上に立つた二年生の君はまだ背が低くて、長い尖つた頭が卓上にちよつと見えるという姿であつた。所がその少年が卓を叩いて素晴らしい熱弁を振つた。演題は「自治」というのであつた。私の日記は「言語に淀みなく、論旨明徹、熱烈、痛快、降壇の際拍手鳴りやまず、本日の最も優れた雄弁なりき」と評している。

君は当時私達の主任教師であられ君の従兄に当る望月先生のお宅から通学していた。学校から東五キロ余りの村から田舎道を通う私は、学校に比較的近い葺合上筒井から降りて来る、白い風呂敷包を抱えた君に行き会つて、学校までの二三分を語り合つて行くのがとても楽しみであつた。うまく行き会えなかつた時はほんとに物足りなく淋しかった。

「自治」という作文があることは、すでに第一章でふれた。恐らくはその作文を基とした演説であつたのだろう。矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』⁴もそう書いている。この本には忠雄と大利武祐、川西

實三、それに下級生（忠雄と武祐が五年生の時二年生）の増井正治の四人が映った写真が挿入されている。増井とは、川西が忠雄にその指導を頼んだことから深い交際がはじまったのである。また、この増井正治の姉艶子が忠雄と相愛の關係になることを、矢内原伊作は「初恋」の見出しのもと詳しく描く。主要な資料は全集未収録の中学時代の日記である。それによると同年同月生まれの子は、手を握り合ったり、抱き合ったり、首筋にキスをしあつたとある。忠雄と増井艶子の交わりのピークは、忠雄の神戸一中五年生の冬休みのことであつた。謹厳実直ということばが生涯つきまとう矢内原忠雄にも、誰もが体験する淡い恋の経験があつたというのは、ほほえましいことである。なお、一高時代、一九一（明治四四）年の忠雄の日記にも、艶さんこと「御影のお姉さん」増井艶子の記事が、折々見られる。

四年生の頃から忠雄は自身の将来について真剣に考えはじめていた。彼の生家は代々医者であり、親族にも医者が多かつたから、はじめは彼も医者の道を考えてようである。が、先輩川西實三のいる一高法科への願望が次第に芽生えるようになる。それには川西の強引な勧奨があつた。忠雄の「私の人生遍歴」⁵⁾には、以下のようにある。

私は家が医者なものですから、自分も医者になるつもりでおりましたし、また人々もそう期待をしておりました。ところが、中学校を卒業しまして、高等学校の入学試験を受けるときに、川西君が、私も自分の後をついて当然東京へ出て、一高に入るべきものだ、一高では、やはり川西君自身のあとを通過して、法

科にくるべきものだというふうには、まあ、川西君が私の通るべき道をきめたようなものです。私もそれに対していやではありませんし、また川西君を先輩として尊敬しておりましたから、万事その指導に服したわけです。

一方、川西實三は先の「渡し守」に「一高へ強引に勧奨」という項目を立て、長い長い手紙を書き、一高に来ることを勧めたと書いている。中に「その手紙を君は運動場の片隅で友人等に読み聞かせるといふ有様であつた。川西は一高生活を大いに楽しんでるよいうだが、一高でなければならぬように宣伝するのは困つたもんだ」と鶴崎校長が嘆かれたと聞いた事もある」とある。

当時の一高は、と言うよりも、当時全国に八つあつた高等学校は、一部、二部、三部に分かれ、それぞれ法文科、理工科、医科にコースを形成していた。忠雄の目指したのは一部である。第一部は甲類、乙類、丙類、丁類に分かれた。甲類は法科である。乙類は文科の英文科、丙類は独語法科・独語文科、丁類は仏語法科・仏語文科である。仏文学志望のコースは、他の七つの高等学校にはなかつた。が、一高には存在した。前年入学の豊島与志雄が在籍したのは、このコースであつた。

神戸一中五年生時代の作文に、「おのが志望をのべて意見を求むる書」⁶⁾というのがある。この文章には、忠雄が卒業を三ヶ月後に控え、進路に迷っているさまがよく現れている。貴重な文章と思われるので、以下に全文を引用する。

謹啓 時下寒冷の候に候ふ処先生様には御多祥にわたらせら

れ候ふや。扱て私卒業期も追々切迫致し志望撰定の要にせまられ候ふも、高等学校一部(法)にせんか、三部(医)にせんか、この点に就きて未だ十分の確定を見るに至らず最寄りの諸先輩に意見を求むるも区々にして、心甚だ迷ひ悶々の情に堪へず、今日は失礼ながらわが心中を述べて先生の御高説を承り度候。

先づ小生の性質を省みるに比較的数学的頭脳に欠けたり、故に二部は適せずと存候、されば剩す処は一部(法)三部の両途に候。さて之をわが短所より見れば政治家たらんには縦横経世の才に乏しかるべく刀圭家(筆者注、医者)たらんには手工の妙に欠けたるべしと雖も、長所よりすれば真摯着実、いづれにも適せりと存じ取捨甚だ迷ひて決を見がたく候。次に家庭の事情よりすれば、家代々医を業とせるも家兄以て箕裘をつぐべく小生は必ずしも医たるを要せず、志望撰定が自由なるだけ、決定に心まどふ次第に候。吾人は社会に一般化せらるるを要すると共に、また社会を特殊化するを要す、わが父、叔父、姉婿、皆医家なり、而して我若し医たらむか、わが家門はますく、医を以て社会に貢献するものといふべく、従来得たる名声を一層拡むるを得ることと存候。加ふるに家兄は不治の病魔に胸を犯されたり、私の医たるは実に父母の心を安んずる上に於ては順路なるべし。また医家にそだし余、医たらんと念は幼兒より已に先入主となりたるの感これあり候。翻つて一部は品性修養に最も便利なること、其学科の歴史、漢文、語学等、おのが好めるもののみなることなどを思へば自ら一部に傾くを覚ゆるも、少しく静まれば矢張り三部を、とはわが心の閃きに御座候。

また社会に貢献する上よりいへば医者たると政治家たると甲乙なかるべし、一は人の病を医し、他は国家の疾を治す、いづれも尊き職なり、我、良相たらざんば必ず良医たるべし。いづれか志望定りたらば、それに対して奮励努力、必ず人にすぐれたる大人物となりて国家社会につくすだけの覚悟と意気込みと素養とは不肖ながらも小生これを具有するつもりに候。目下はただこの覚悟を実現すべき手段を撰ぶに迷へるにて候、先生、生が心中悶々の情を察せられなば、願くは一言の御高論を惜みたまふ勿れ、寒気の候折角御自愛あらんことを願上候 敬具
(十二月十一日、即題)

最後の括弧内の「即題」とは、その場で題を出され、即座に詩文をつくることと辞書にある。恐らく国語の時間に課題作文として出されたものに、とっさに応えて書いたものなのであろう。当時の自身の重要問題であった進路に関して取り上げたのは、時宜にかない、内容は空論にならず、自身の切実な問題として打ち出されている。しかも、満々たる自信は尋常でない。それにしても漢語を駆使しての文章は、見事なものである。現代の大学生にしても、とうてい及ばない文章である。中学生矢内原忠雄は、歴史・漢文・英語が得意であった。文中に見られるように、「一部は品性修養に最も便利なること、其学科の歴史、漢文、語学等、おのが好めるもののみなることなどを思へば自ら一部に傾くを覚ゆる」というのもよく分かる。

ところで、神戸一中の五年生生活を送っていた矢内原忠雄は、副組長として校風遵守を叫ぶ生徒であり、後年のこの人物からは想像

も出来ない面を示していた。そのことは矢内原伊作の『矢内原忠雄伝』や、それを下敷きにした竹田行之の「神戸一中の『高い山』——大塚金之助、矢内原忠雄、河野与一、吉川幸次郎氏のこと」⁷⁾に詳しいので、ここでは簡略な紹介にとどめる。

忠雄が卒業を五ヶ月後に控えた一九〇九(明治四二)年十月三十日に開かれた一中の談話大会(弁論大会)で、同じ学年の松永信成という牧師の息子が、「旧き家は朽ちたり」と題して、自治の名の下に、上級生の下級生に対する一方的制裁があるとの内容の演説をした。この校風批判に対し、忠雄は直ちに講壇に立ち、松永に対して激しい攻撃の演説をなした。その上に談話大会終了後、松永に鉄拳制裁を加えたというものである。鉄拳制裁とは、規則を守らなかった者に、殴る・蹴るなどの暴力を加えるというしきたりをいう。愛校心に燃えた校風論者が、その批判者に制裁を加えたことになる。キリストの教えに接する前の忠雄の一面を語る事件とでも言えようか。後年、忠雄は個人誌『嘉信』に、この事件を回想している。「小さいサウロ——中学時代の思い出」と題したものである。短いものなので、全文を引用する。

私の学んだ中学(神戸一中)では、「質素剛健」「自重自治」という二つの標語のもとに、ある気風が伝統的に出来ていた。この気風を「校風」とよんで、これを維持することが愛校心の内容であった。

このような校風というものは、全校の生徒の生活態度や心構えを一様に統制しようとする傾向を自然にもつものであるが、私はその保守的・伝統的な校風論を尊重する熱心な愛校者の一

人であった。

私の同級生に松永信成といって、神戸教会の牧師の息子がいた。私どもが五年生であったとき、松永が談話大会——弁論大会のことを、そう言っていた——で「新しき酒を旧き革囊に盛るべからず」と題して、校風論批判の演説をした。当時小サウロであった私は大いに憤慨し、第一、その耳なれない、ヤソクさい、きざな演題が気に入らないとして、次の談話大会で校風論擁護の演説をしたのであった。

松永は早大のロシア文学科に入学したが、不幸にして学業成らないうちに早逝した。小サウロであった私は、神の導きにより今あるところの恵みに入ることを許されたのである。

また、前章で引用した「中学の五年間」⁹⁾では、「松永君が談話会で新しき酒は旧き皮囊に盛るべからずといつて固定的形式的な校風論に反対せられた時彼は大いに怒つてそんな事は猶太の砂漠へ行つて言うてもよいが我神中¹⁰⁾では断じて許さぬと敦¹¹⁾圍¹²⁾いた。彼は愛校の情に燃えて居たのではあるが何も知らぬのであつたから何卒許して貰ひたい」と書いている。「中学の五年間」では、右の文に続いて「川西君からは花火線香のとび跳ねた様な字で野紙に細かく書いた手紙が度々届いた。その一通毎に一高精神界の嚴肅な波動が溢れて居た。校友会雑誌、『聖書之研究』といふ雑誌、二三の書物なども送つてくれた。之等が彼に影響を与へた事は非常であつた。彼は一も二もなく一高を志望した。彼が川西君に感謝する情は誠に深い」とある。

生誕の地、今治がキリスト教の町とまで呼ばれたとは、前章でふ

れた。が、忠雄の住んだ松木^{まつぎ}という農村部には、影響がなかったと後年回想していることも述べた。また、神戸一中は札幌農学校出身の鶴崎久米一がその基礎を築いた学校ながら、キリスト教との関わりなど、忠雄の中ではまったく意識されていない。在学中の忠雄は、そうしたことには関心が少なかったのである。後年になってはじめて、脈絡が着いたかたちで、幼い頃からのキリスト教とのかわりが自覚されるのであった。

矢内原忠雄が神戸一中を卒業するのは、一九一〇(明治四三)年三月二十五日のことである。彼は第十一回卒業生総代として答辞を述べている。当時の学制は、中学校の卒業が三月下旬、高等学校の入学試験が七月中旬、入学式が九月十日頃というのが一般的であった。忠雄の志望校は前年の暮れには、川西實三の強い勧めもあって第一高等学校の法科と決まっていた。受験コースで言うと第一部甲類ということになる。彼は受験勉強に精を出す。同じ年一高第一部乙類(文科、英文)を目指した芥川龍之介は、一日「十時間内外」の勉強(山本喜喜司宛芥川書簡、一九一〇・四・一八付)をこなしていた。忠雄もどちらかというと不得意な幾何・三角法などを中心に勉強をはじめた。彼は神戸一中卒業後も大利武祐の家に止宿し、受験勉強に励んだ。

一高の法科、第一部甲類は人気のあるコースで、入学試験はかなり難関とされた。天下の一高には全国から多くの秀才が志望するようになり、入試は激烈な競争となっていた。浪人も多数生まれ、社会問題化していたのである。入試制度の弊害も言われはじめた。そうしたこともあってか、文部省は入試改革に着手し、この年五月十四日、無試験検定制度を発表した。内容は全国の高等学校の定員五

分の一以内に限り、中学校長が優秀と認めた生徒を推薦し、高校側は書類選考して、試験に先立ち無試験で合格させるというものである。この年の一高無試験検定制度の発表は、六月二十四日であり、一般試験の出願締切は翌日の六月二十五日、入学試験は七月十一日からであった。

当時、一高を受験する地方の中学生は、中学卒業と同時に上京し、七月の試験に備えるのが、普通であった。受験生には中央大学の予備校の評判が高かった。東京の川西實三からは、少しでも早く上京するようにとの便りが届く。川西はこの年一高を卒業するので、仲間の「読書会」の連中に、この優れた後輩を紹介したいという願いもあった。そこで忠雄は寄寓先の大利武祐の家から五月二十一日、川西の薦めに応じて上京した。宿は神戸一中の一年先輩の鶴田悌三の下宿にした。川西の斡旋だったという。その一週間前には、無試験検定制度が発表されていた。『矢内原忠雄全集』第二十九巻の「年譜」には、この時の上京は、五月二十一日から六月二十五日までの約一ヶ月となっている。忠雄は神戸一中では成績抜群、品行方正で先生方の覚えもよかったため、鶴崎久米一校長は文句なく忠雄を推薦する書類を作り、一高に送り、忠雄にも伝えた。中学校長の推薦者は、複数でもよかったようである。同じ年東京府立三中を卒業し、一高を目指した芥川龍之介の同級生では、芥川と仲のよかつた西川英次郎も推薦され、二人は共に合格している。

推薦合格、つまり無試験検定制度の発表は、六月二十四日なので、忠雄はそれを確認し、故郷にもどることにしたのである。が、発表までに一ヶ月余あつたので、その間東京では、勉強に励まねばならなかった。無試験検定制度が不合格になったときには、一般入試を

受けなければならなかったからだ。無試験検定合格は生やさしいものでなかったのである。なにせ全国各地の中学校、しかも、歴史のあるナンバースクールからの応募者が多いからである。一高には神戸一中からの優れた先輩が学んでおり、その名が通っていた。そこで学校推薦になったことを知った忠雄の先輩や知人は、合格間違いなしと言ったとされるが、発表まではわからないことである。

この東京滞在中、川西實三は忠雄を新宿に近い柏木で開かれた内村鑑三の講演会に連れて行った。先の「年譜」には、六月四日に柏木今井館で内村の「スチーブン・ジラードの話」を聴くとある。忠雄がはじめてこの偉大な先人に会った日である。矢内原伊作は「矢内原忠雄の全生涯において内村鑑三がもっていた意味の大きさを思うとき、記念的な出来事だったと言わなければならない」と書く。また、川西は忠雄の上京中、「読書会」と名付けた集会を忠雄の止宿している鶴田悌三の下宿で開いた。そこには森戸辰男・三谷隆正・沢田廉三らが集まった。

無試験検定合格者の発表当日、川西實三は忠雄をつれて新渡戸校長宅に行き、忠雄を紹介し、それから新渡戸と共に、一高へ行った。幸い忠雄の名は掲示板に載っていた。入学許可候補者の名の掲示は、成績順である。彼は第一部甲類（英語法科、政治科・経済科、二番での合格であった。試験合格を含めての最終合格者は、『官報』にも出た。当時『官報』は、喫茶店などにも置いてあり、人々の情報源の一つでもあった。『官報』の「学事」欄に、「入学許可 第一高等学校ニ於テ来ル九月十一日ヨリ大学予科ニ入学ヲ許可スヘキ者ノ族籍、氏名左ノ如シ ×印ハ無試験検定ニ合格シタル者ナリ（文部省）」として、第一部甲類から第三部独までの合格者名が載った

のである。

わたしは早く『官報』を国立国会図書館法令議室資料室で閲覧し、該当箇所のコピーをとっていた。今手許にあるそのコピーを見ながら記すのだが、第一部甲類の無試験検定トップ合格は、新潟県士族高橋 浩である。続いて愛媛県平民矢内原忠雄の名がある。群馬県平民の洪澤直一は、無試験検定四番の成績、山形県平民宇佐美六郎は同七番、千葉県平民石井満は同九番である。第一部甲類の無試験検定合格者は十四名、試験合格者は六十二名であった。試験合格者のトップは神奈川県平民井上庚二郎、四番に奈良県平民井口孝親が、五番に神奈川県平民舞出長五郎が、八番に京都府平民三谷隆信の名が見える。試験入学組には、他に小畑忠良・細川嘉六・目崎健司・野呂一雄らがいた。いずれも以後矢内原忠雄と深い関係を結ぶ人々である。

第一部乙類（英語文科）に眼を転じると、無試験組のトップ合格は、高知県平民の長崎太郎である。一高では矢内原忠雄・三谷隆信らと基督教青年会の仲間となる。後年、京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）初代学長として、優れた人材を多数輩出させた人である。三番には非行少年少女の教育で名を成した兵庫県士族の石原登、四番が東京都士族の芥川龍之介である。第一部乙類は定員が少なく、無試験検定合格者は八名に過ぎない。ついでに五番以下の名をあげると、五番は後年日本共産党初代委員長となる佐野文夫、六番は京大教授となった小来栖國道、八番が久米正雄である。試験合格者は二十一名、後年名を成した人では、四番に菊池寛、五番に石田幹之助、七番に井川（恒藤）恭、八番に松岡善讓（のち「讓」一字に改名、飛んで二十番に藤岡藏六の名を見出すことができる。の

ちに第三、四次『新思潮』同人として、芥川や久米正雄・菊池寛らと活躍する成瀬正一せいいちの名はない。成瀬は矢内原忠雄の志望したと同じ第一部甲類（英法）が第一志望だったが、不合格となり、補欠で第二志望の第一部乙類（英法）に合格、授業がはじまってしばらくしてから登校することになる。

『官報』第八一三七号を見ながら記しているので、ついでに他の部類合格者をあげると、第一部丙類（独語法科・独語文科）には、無試験検定合格者に藤森成吉、試験合格者に倉田百三・井野硯哉・秦豊吉らが、第一部丁類（仏語法科・仏語文科）には、三溝又三・渋澤秀雄らが、第二部乙類（理科・農科・薬学科）に芥川と府立三中で成績を競った西川英次郎が、無試験検定トップ合格を果たしている。第三部独（医科）には芥川のこれまた府立三中時代の仲間、上瀧こうたまたかしが試験合格二番で通っている。なお、芥川・久米らのクラスには、前年入学ながらドイツ語の試験に失敗した山本有三・土屋文明らが、原級止まりとなっていたことも記しておこう。それに一年以上に近衛文麿・豊島与志雄らが、二年上に河合榮治郎・河上丈太郎・高木八尺やまか・田中耕太郎らがいたことも。

二 入寮と新渡戸稲造校長

第一高等学校（略称、一高）は、一八七四（明治七）年十二月、東京英語学校として開設された。その後東京大学予備門、第一高等学校の名称を経て、一八九四（明治二七）年に第一高等学校の名称になったものである。歴史の最も古い国立の高等学校として次第に

名声が高まり、一九〇〇年代には、天下の一高とまで言われるようになっていた。旧制の中学生あこがれの学校であった。矢内原忠雄や芥川龍之介らが入学したところの一高のことは、『第一高等学校一覽（明治四十二年）』（売捌所丸善株式会社、一九〇九・二二・二六）を見るとおよそのことがわかる。まずは教員組織だが、『一覽』の第六章に職員名簿が載っている。それによると学校長新渡戸稲造、教頭菊池壽人となっている。講師を含めた第一高等学校の全教師が、この名簿によって確認できる。

一高は全寮制（皆寄宿寮制）をとっていた。寄宿寮は東寮・西寮・南寮・北寮・中寮・栄寮の六つがあった。一高では方針として一年生の時は、類・専攻を問わず、さまざまな生徒と起床を共にさせた。入学の時点で上級生の寮委員が、新入生の入る寮の部屋を決めたのである。二年生以上になると、英法とか英文科などクラス別に分かれて、希望の者同士で部屋に入ることができた。一室十二名である。矢内原忠雄が新入生として入った部屋は、南寮十番であった。同室の仲間である他の十一名の氏名は、現在井川（恒藤 恭の『向陵記』や森田浩一の『浩一日記』から簡単に割り出すことができる。一応入学時のコースと出身地を記した氏名を列記するなら、渋澤直一（第一部甲類 群馬）、牧田弥次郎（第一部丙類 大分）、三溝又三（第一部丁類 岐阜）、小池四郎（第二部甲類 東京）、武田章一（第二部甲類 静岡）、井川恭（第一部乙類 島根）、森田浩一（第二部甲類 東京）、前田仙太郎（第二部乙類 愛知）、都築正男（第三部英 兵庫）、水澤雄三九（第三部英 新潟）、山岸博愛（第三部独 埼玉）である。右のうち井川（恒藤 恭は、後年の法哲学者で大阪市立大学学長、戦後の平和運動のシンボル時存在となった人。都築正男は、日本赤十

字社中央病院長などを務めた人である。

入寮は授業開始前日の前日の九月十一日、日曜日に行われた。同室の井川恭の日記(『向陵記―恒藤恭 一高時代の日記』)に、入寮のようすが詳しく書き込まれている。「九月十一日 日曜 曇」と題して、井川恭は大学ノート五枚ものスペースをとって、記念すべき入寮日の一日の出来事を記している。矢内原忠雄は克明に日々の出来事を記した人だから、井川恭同様に詳しい入寮日記を残しているに違いない。が、『矢内原忠雄全集』第二十八巻には明治四十三年の日記は収録されていない。全集収録日記は、明治四十四年から始まり、「留学日記」を含め、断続して戦後の昭和二十二年までの選ばれた十年間分のみである。全集第二十八巻の「編集後記」を見ると、明治四十三年の日記は、存在することになっている。すると、いつかは見る事ができるのであろう。しばらくは時の経過に期待するほかない。なお、『矢内原忠雄全集』第二十八巻の日記は、プライバシー保護のためか、第三者のフルネームに気を配り、A B C D……XYZなどの記号使用が目立つ。これもやがては時効を迎える時が来る。それまでは慎重な扱いが求められているとしておこう。

入学当初の矢内原忠雄の日記は、現在のところ閲覧不能だが、周辺人物、特に同室となった井川恭や森田浩一の日記が近年発掘され、そこから忠雄の一高入学当時の状況は推察できるようになった。『向陵記―恒藤恭 一高時代の日記』に、矢内原忠雄が最初に登場するのは、入寮三日目の一九一〇(明治四三)年九月十三日、火曜日のことである。前日の十二日には、今日言うところのオリエンテーション、ガイダンスがあり、南寮十番の仲間には皆顔なじみに

なっていた。この日は午前中に入学式もあった。矢内原忠雄は一高第一大教場(倫理講堂)で新渡戸稲造校長の講話をはじめ聴いた。井川日記(『向陵記』)の十三日の「夕べ」のところに、「一つおいてとなりの矢内原君が食堂へゆきませんかといふのでつれたつてゆく」とある。

一九一〇(明治四三)年九月、一高入学当初の忠雄日記は、前述のように公開されていないので、いましばらく井川恭の日記『向陵記』に出て来る忠雄を追ってみる。入寮四日目の夜、ストームに襲われた一件である。引用しよう。

夜半のゆめにあそんでみると、突然何かの物音! ハと目をさますと、ドヤ〜入りこむ人の数。ヤとその瞬間に起き上つてふとんをかゝへこむ。

総勢七、八人、二、三人ハ例の提灯をもつてゐる。

「デカンショ〜で半年やくらす

ヨウイ〜デッカカンショ

「おきろ〜」

となりの矢内原君、たわいもなくねてゐたので、「ヤイきさま、おきろ」と、ふとんをまくし上げられ、頓狂なかほをして体をおこす。

「ヤ、立たなくてもいゝ立たなくとも」

デカンショ〜で、又出ていつてとなりの室をおそふ。

「花のお江戸で芝居する、ヨイ〜デッカカンショ」

床をドンドンふみならず。

あとは皆が言ひ合したやうにハ、とわらうて、ふとんをひつ

かぶる。

ストームはだん／＼遠ざかつてゆく。

一としきりさわいでをりていつたやうであつた。

一高名物のストームには、矢内原忠雄も驚いたに違いない。寝ぼけ眼で「頓狂なかほをして体をおこす」のも無理はない。忠雄は一高入学時には背はぐんと伸び、一八〇センチ近くなる。また、神戸一中時代の柔道の影響もあつて、胸幅は広がった。しかし、一八九三(明治二六)年一月生まれの彼は、南寮十番の中では一番若い。それだけに若い魂は、ストームにも驚いているのである。井川恭の筆は、そうした忠雄を的確に捉えている。

寮は自治寮とも言われるだけあつて、すべては同室者の総意で事は決められる。南寮十番の総代に忠雄は三溝又三を推薦した。三溝はナポレオンの紳名をもつ好人物である。後年東京帝国大学法科大学を卒業、満鉄に勤務した。井川日記『向陵記』の九月十六日のところに、「矢内原君が三溝君を総代に指名する。皆賛成する。三溝君ハ「ソリヤいかん、ソリヤいかん、総代なんか御免だ。そんな事ハ東京の人に限る。僕なんかともいかん」なに、こんな事ハ法科の人に限るよ。弁論がうまいから。それに君、仏法の人は外交がうまいから」「なアに、ドイツは思想が発達して国民が堅実だから、ドイツ語のうまいひとにやらすがい、」とあり、総代を決めるのに忠雄が一役買ったことをうかがわせる。早生まれながら忠雄は、浪人生や前年生まれの人々の中にあつてもおじけることはなかった。神戸一中での副組長体験もあつて、人を動かす能力が備わっていたのである。

新入生をクラブ活動に勧誘するのに、上級生が寮を回る。南寮十番にもその人々が来る。井川恭の『向陵記』は、それを伝える。矢内原忠雄の名が出て来るところを引こう。入寮五日目、九月十五日の夜の勧誘の様を記したところである。

暫くすると、又ガヤ／＼はいつて来て「柔道部を紹介します。諸君、誰もやり玉へ。何、始めての人でもい、からやり玉へ」。大学の人もひとり居てす、める。矢内原君のところに来て、「君やりませんか」といふと、「僕ハどうも趣味が適しませんから」「ヤアそいつハ」と頭をかく。「始めての人ハいくらでもあるよ。この委員の人なんか、始めてこ、でやつたんだ。それ、あの提灯を持つてる人なんか、こ、で始めてやつたんだよ」「オイ君よせ／＼。僕もこの南寮十番にゐたんですよ。縁がふかいから諸君やり玉へ」「こ、は道場に近いかから一番い、。高等学校三年間運動をやらなくちや駄目だよ」。(中略)

それが出てゆくと、こんどは弓術部、大学生もある。矢をもつた人がある。「運動をやると時間が無くなるやうに思ふ人があるが、なアにそんな事ハ無いよ。やり玉へ／＼。皆はじめてなんだから」。

矢内原君と武田君がはいる。矢を四本と弦をかはされる。入れ代つて陸上運動部がくる。矢内原君をつかまへて「君ハよさそうだ、是非やり玉へ」「僕ア弓術部をやるんですから」「だつて君、両方やればいい。弓術でウンと胸廓を広くして、それから大にランニングをやると、それはい、体格になるぜ」。皆ドットとわらふ。

忠雄は弓術部に入ったのである。先にも記したが、一高入学時の忠雄は背が伸び、肩幅も広く、運動選手向きの体格になっていた。それゆえ柔道部や陸上運動部からも勧誘を受けている。ちなみに、井川恭はボート部に入った。

弓術部の外に矢内原忠雄は、いま言う文化部の基督教青年会と弁論部に所属した。こうした部活動に参加しない生徒も多かった。たとえば同じ年、一高第一部乙類(英文科)合格の芥川龍之介は、部活動に加わっていない。もともと芥川は、最初の学年は寮生活をせず、新宿の自宅から通学していたので、クラブ活動どころではなかったようだ。矢内原忠雄はこの点、部活動も一高生になった証とばかり、積極的に参加した。相変わらず彼は模範生だったのである。これらの運動部や文化部での忠雄のことは、追いついて述べていくつもりである。

矢内原忠雄の一高生活は、順調に滑り出した。九月十三日の入学式で、彼ははじめて神戸一中時代から尊敬してやまなかった新渡戸稲造校長の講話を聴く。後年彼は『余の尊敬する人物』¹⁴に、新渡戸稲造をとりあげ、この時の講話を「入学式演説」として回想することになる。そこで煩をいとわず、まず、忠雄の書き留めたノートから起こしたという、新渡戸稲造の入学式演説を転記しよう。

『九月十二日入学式 雨天

校長演説

○旧生徒諸君、諸君は新に弟を得られたのである。私の子供を米国の或る中学に入れてあるが、この程帰朝して言ふには、

その中学では新入生が来れば、それを一二つつ上級生に割り当てて、一切の指導監督をば責任を以てやらせ、その学校の事情に通じさせてやる、といふことである。誠にかかる方法は望ましいことである。新入の諸君も、上級生の顔だけを見て怖いとの気を起さず、兄貴分だと思ふ心持であるがよい。

○我が国の学校で最も情ない事は、訓育の欠乏してゐることである。イギリスのパブリック・スクール、たとへばイートンやラグビーのやうな学校では、校長に非常に立派な人を据え、その人物に対して社会は高き尊敬を払い地位を与へてある。生徒は常にその先生に私淑してゐる中に、言ひ知れぬ感化を受けるのである。我が国でも、制度は作れば出来る。人物を捜せば居るかも知れない。しかし現在のところでは、之に欠けてゐる。わが一高なども、残念ながらこの点が不十分である。先生方はいづれも人格の高いお方のみであるが、その授けられるものは専門の学科であつて、人格の感化といふところまでは、なかなか手が行き届きかねる。それでは誰がその不足を補うて訓育を為すべきかといへば、校長である。しかしながら情けないかな、我輩の如きは人格の感化皆無ともいふべきであつて、到底訓育を立派に為し遂げるといふやうな事は出来ない。そこは諸君お互の友情で以て補はねばならぬ。諸君は大抵新しい友だちを作る境遇にあることと思ふ。よく心して親しき友を選び、友情の力を借りて自己の訓育を為し遂げるやうに努めねばならぬ。自分が敬服した人を見たならば、淡泊に話しかけるがよい。自分の方から口をきけば、何だか負けたやうに思つたり、或は諂ふやうでいさぎよしと思はぬ者もあるかも知れんが、そ

んなつまらぬ事はない。皆平等である。諸君の中には皇族に近い位に高い家柄の人も居るが、この学校に在つては甲も乙も皆同等である。

○諸君お互の間、及び教職員に対しては礼をするやうにした。之はお互の帽章に対して礼をするのである。又先生方に校外で出会つた時にも、礼をすべきである。見受けたところ、諸君の中には眼鏡をかけた人も多いやうだが、「どうも先生に似てるやうだが、つい間違つたら悪い」などと思つて、礼をせず置くやうではいけない。誰と間違つてお辞儀をしたとて、決して悪いことはない。皆の人が偉いのである。或る名僧は会う人毎に合掌したときさへいふ。

○この八月は誠に忘れ難き月である。一つは全国各地の水害で、損害額三千万円内外といふことである。世間には、或ひは洪水の爲め土地が肥えた処があるとか、土砂がタスカロラ海床を浅くしてその爲めに地震が少なくなるだらうとか、土砂が多く海中に入つた爲めに魚族が繁殖するだらうとか言う人もあるが、こんな事は当てにはならぬ。この三千万円は先づ絶対的の損失と見ねばならぬ。我輩はその時強く思つた事であるが、わがこの一千の諸君の中からその一生を治水の爲めに捧げる人はないだらうか、植林の爲めに捧げる人はないだらうか、又水害後の救済事業に志のある人は出ないだらうか、と思つた。

以上が一九一〇(明治四三)年入学式での「校長演説」(式辞)を、忠雄が記録したものである。若干説明を加えると、全体は四つに区切られている。最初のセクションでは、アメリカの大学で早くから

行われ、日本でも大学紛争以後取り上げられ、近年は留学生の指導にも応用されているような新入生対策の要を語る。二つめは、日本の学校で不足している訓育について述べ、「友情の力を借りて自己の訓育を為し遂げる」よう勧めている。第三は礼の遵守である。「武士道」を書いた人らしい発言だ。第四のグラフィックに見られる「全国各地の水害」とは、一九一〇年八月八日の東海・関東・東北一帯の豪雨をさす。各地の大洪水は記録に残る被害をもたらした。芥川龍之介に、この大洪水の際のボランティア活動を記録した「水の三日」がある。

この講話をまず写した後、忠雄は「右の演説を今読み返して驚くことは、それが隙間だらけなことです」と言う。そして、その隙間ゆえに新渡戸は、「多くの誤解、批難、迫害を受けたのでありました」とし、以下、四つの柱を立てて考えている。第一は、「我輩の如きは人格の感化皆無ともいふべき」との告白を問題とする。忠雄は言う。「若しも多少なりとも人格者とか教育者とかの自負心を有つ人がかかる言葉を口にすれば、それは鼻持のならぬ偽善でありませう。又実際人格の低劣な人間がこれを言へば、それは堪へ難き傲慢でせう。然るに先生は多くの人に勝れた人格的感化を与へた人であるに拘らず、自身では人格者であるとの自覚を有たず、「我輩の如きは人格の感化皆無」といふことを、正直にさう思ひ、正直に口にした」のに、世人は「彼は偽善者である、地位に恋々たる者であると批難した」とする。

第二は、「皇族に近いほどの家柄の人」と言つたのは、当時二年生に在学中の公爵近衛文磨君のことを意識したに違いないが、こういうことばは言わない方が安全である。「不敬」とか、「権門勢家に

媚びる」といった類の批難を蒙る恐れがある、また、「公爵も平民もこの学校では同等である」を取り上げたのは、革命的な人生観であるとした。武士の子として生まれた新渡戸が、「人間の価値は社会的階級によらない、人間としてすべて同等に貴いものである」との考えは、「先生自身旧きに死んで新たに生くることによつて得た実験上の真理」と忠雄は言う。

第三に、生徒同士、そして教職員に対して、お辞儀をせよとの教えは、小学一年生の入学式において教えるようなことで、「一高校長の演説として余りに通俗的、常識的であるとの感を懐く人が多いでしょう」としながらも、ここには「みんなの人が偉いのだ」という思想があるとする。「人を人たるが故に重んずるといふ人格(パーソナリティー)の観念は、先生の人生観の根本」と忠雄は言うのである。「お互にお辞儀をせよ。人違ひしても悪いことはない」の新渡戸のことは、忠雄は「この平凡な、常識的な言の中に、新渡戸先生自身の到達した精神的苦闘の成果があり、又先生の教育精神も籠つてゐる」とする。こうした訓話の中に、「鎖国的籠城主義の一高生に対して人格の自覚を呼び起し、個性を解放し、それに基づく新たな友情を刺戟」するものがあつたと言う。こうした考えが旧弊な考え方にそまつた「籠城主義者からは軟弱である、八方美人である、一高校風に適はない」として、激しい攻撃の的となつた時代もあつたという。

第四は、卑近な校内生活から一転し、極めて重大な国家問題へと移る。一九一〇(明治四三)年八月の日本各地を襲つた水害、——言わば国難ともいえる災害、国家問題への新渡戸校長の考えの検証である。忠雄はこの件を前段からの「見事な飛躍」とし、続けて「そ

の時生徒の中の幾人が、問題の重要性を認識し得たでせう」と言う。新渡戸は、この段で二つのことを述べた。大水害を前にした、治水・植林の必要と水害後の社会救済である。忠雄は「我国の如く天災の多い国では、災害の予防並に対策の研究は国力を養ひ民衆を救ふ上に於いて大なる意味のあることであり、先生は夙にその必要を暗示した先覚者の一人」であると述べる。「先生が一高入学式演説で、天災予防といふ頗る地味な、しかしながら永久的な効果ある重要な事業の為に生涯を獻ぐる者が、この一千人の中から出ないだらうかと呼びかけた」のは、極めて暗示的な話であるとする。確かに二〇一一(平成三三)年三月二日の東日本大震災を経験した現在、南部藩士の子で盛岡に生まれた新渡戸稲造の一〇〇年前の提言は、矢内原忠雄が喝破したように、先覚者のことばであつたことがよく分かる。

新渡戸稲造は一八六二(文久二)年八月三日(新曆九月一日)、南部藩士の子として盛岡に生まれた。札幌農学校の二期生である。その根底にはキリスト教の信仰があつた。彼はすぐれた学者であつたと同時に、教育者でもあつた。矢内原忠雄は入学式での新渡戸の「隙間だらけ」の講話から真実を見出していたのである。むろん「入学式演説」は、忠雄が文字に書きとどめたことのほかに、その話しぶり、——声量・滑舌・ことばの間・身振りなども関わるものである。また、彼を一高に導いた川西實三の新渡戸礼賛のことが背後にあつた。つまり新渡戸稲造の「入学式演説」、それに続く毎週月曜日の修身講話を熱心に聴く土壤は、神戸一中の先輩川西實三によつて耕されていたのである。

もつとも新渡戸ファンは、一九一〇(明治四三)年九月入学の新

入生には多かった。文科の芥川龍之介も井川恭も松岡譲も成瀬正一も、そして藤岡蔵六もそうだった。藤岡蔵六の回想記『父と子』¹⁶⁾には、「九九 新渡戸校長」の章がある。そこで藤岡は「概して無味低調な授業の中、新渡戸校長の修身講話だけが光っていた。農学博士法学博士新渡戸稲造先生は、毎週一回一年生全部を講堂に集めて、修身講話をされた。私は非常な興味を以てそれを傾聴した」とある。こうした生徒は数多くいた。藤岡はさらに語を継いで、「先生は申分の無い立派な紳士であった。日本に於ける知識層の最高連峰の一つであり、国際的文化人として不拔の地歩を占めて居た。私達の眼を国際的に開き、自由を愛し平和を喜ぶ氣風を養い、偏狭なる愛国主義や固陋なる国粹論に陥ることを防いだのは、先生の感化力に負う所が頗る大きい。私は一高三年間を斯かる名校長の下に過ごし得たことを喜び且つ感謝して居る」と書く。

が、一方で新渡戸は、学内の保守派や国士的卒業生の一部から排斥の声が挙がっていた。新渡戸校長攻撃の声は、忠雄入学以前からあった。忠雄の「人及び愛国者としての新渡戸先生」¹⁷⁾から、一部を引用する。

当時の第一高等学校は今日以上に世間の注目をうけてゐたのである。而して寄宿寮に立て籠つて世間と一緒にならないといふ籠城主義が掲げられて来たのである。所に新渡戸博士が京都大学教授から第一高等学校校長になつて来られた。様子を見てもハイカラだ。西洋人が奥様である。学校外の多くの会合に顔を出す。身を処する事が軽々しいといふ批評が起つた。当時先生は『実業之日本』に毎号修養談を出された。そこで通俗雑誌に

下らない事を書いてゐる、卑近な道徳を説いてばかりゐる校長たる職を空しくして居る、原稿料をかせいでゐる、売名、八方美人等と、新聞雑誌に罵詈雑言¹⁸⁾されて、先制攻撃を看板にする雑誌さへあつた。

校内に於ても排斥の声は起つた。私の入学の前であつたが、或年の記念祭の夜の全寮茶話会で激しい排斥演説が卒業生及生徒の或者から出て、先生は八方美人で一高校長たる資格はないから引込んでどうかといふ演説がなされた。其の時の記録を見ると、先生はガウンを着てニコニコしてをられ、「その様態容として常に異ならず」と書いてある。その時先生は校長として自己の信念を披瀝せられたので生徒も先生の人格に触れて、校長排斥の会が心から先生を仰ぐ会に變つてしまつた。その頃自分はまだ中学生であつたがこの事の記してある一高の校友会誌を先輩から送られ、自分も一つ勉強して一高に入らうと決心した次第である。

新渡戸稲造排斥運動は、やがて新渡戸の校長辞任という事態を迎える。そのことは後に取り上げる。その前にどうしても記しておくねばならないのは、新渡戸が文部省から譴責処分を受けることとなる蘆花の演説「謀叛論」とその波紋である。

三 蘆花「謀叛論」

「謀叛論」とは、忠雄らが一高に入学後半年の一九一一(明治四四)

年二月一日、一高第一大教場で行われた弁論部主催の講演会で行った、徳富蘆花の講演題目を言う。蘆花は前年五月に起こった大逆事件に対して、政府の取った処理のまずさ、——社会主義者や無政府主義者に対する弾圧事件を激しく攻撃したのである。明治天皇暗殺計画という容疑で多数の社会主義者が逮捕され、非公開裁判の下、幸徳秋水ら二十四名が死刑の判決を受け、うち十二名が早々処刑されたことに蘆花は激しい怒りを覚える。彼はその憤懣を、「謀叛論」に凝縮し、一高生に語ったのであった。演説「講演」に託した抗議の叫びは、多くの一高生の心を捉えた。

まず、矢内原忠雄が「謀叛論」を聴いた当日の日記の関連箇所を、ここに写し取ろう。幸いこの部分の日記は、全集第二十八巻に見出せる（全集の日付は二月二日となっているが、一日のあやまりである）。

徳富健次郎先生壇上に立たる。先生は武蔵野の一隅に蟄して鳴かず飛ばざること多年、今より四年前、この壇上に立たれて「勝利の悲哀」を叫ばれてより、杳として消息を聞かず、自らトルストイに私淑して田園生活を営んで居らるゝとのみ。先日委員先生の居室を訪ひて演説を乞ふ依頼せし処、頃日思ふ処あり、一高は鬱したる気をはき出すにはよき処なりとて快諾せられたるなりといふ。先生の人格を憧憬する一千校友は勿論、多数の大学生其他学生、場に溢れ、外面より窓にすがりて、大人の警咳に接せんとせり。畔柳部長の紹介の下に壇上に立たれたる人——これこそ我等が敬愛する蘆花先生なれや。豊肥の体にて血色よく、色眼鏡をかけ紋付の羽織を着し、風采堂々たるはずとせず。この場に於て始めて知りたる演題は「謀叛論」。先

生の平生を思ひ演題を思ふ時吾人はその大体を推察せるが如き心地せり。然れども大人の説く処は何ぞ。蘆花先生大逆事件に關して如何の感想を抱かれたる。先生は新局面の発展には志士の必要なるを謂ひ幸徳等は志士なりとの口吻をもらし、当局者の老朽の身を以て若き生命を圧せんとするを叫び「人」といふことを観念の中に入れざるを責められたり。

蘆花の「叫び」を、忠雄は「偽りなき美しき修辭」「熱烈なる精神の渾発」と表現した。わたしはこれまで芥川龍之介とその周辺の青年群像をとらえるのに、蘆花の「謀叛論」は落とすことのできない重要な意味を持つとし、長い期間、考え続けてきた。

二〇一一年二月一日は、徳富蘆花が第一高等学校で「謀叛論」と題した演説を行って一〇〇年目に当たった。そこで、わたしはこのことを特に覚え、「謀叛論」が当時の一高生に、いかに大きな影響を与えたかを、この年『東京新聞夕刊』（二〇一一・一一・二〇）と『ぶん赤旗』（二〇一一・一一・二）の二紙に書くことになる。そこで、ここには『ぶん赤旗』に載った「新しいものは常に謀叛 徳富蘆花の演説から一〇〇年」と題した文章の全文を示そう。

今年の二月一日は、徳富蘆花が旧制第一高等学校で「謀叛論」と題した演説をし、大逆事件で処刑された幸徳秋水らを惜しみ、「百年の公論は必其事を惜むで其の志を悲しむであらう」と説いて一〇〇年になる。

大逆事件にふれることは、戦前・戦中のタブーであったように、蘆花の演説「謀叛論」も長い間一般に知られることがな

かった。戦後になつてはじめて河上丈太郎の「蘆花事件」(『文藝春秋』一九五一・一〇)、松岡謙の「蘆花の演説」(『政界往来』一九五四・二)、浅原丈平の「謀叛論」の回想(『武蔵野ペン』創刊号、一九五八・六)などによつて、演説内容とその時の状況が一般に報道されることになる。言論弾圧が吹きまくる冬の時代と呼ばれる中では、蘆花演説を肯定した文章など、活字では公表出来なかつたのだ。が、当時一高に在学していた一九一〇(明治四三)年九月入学の新入生の多くは、日記に蘆花演説を秘かに書き残した。その例となる貴重な日記が近年次々と発掘され、「謀叛論」に新たな光を与えることになつた。

蘆花の演説「謀叛論」は、当時活字にはならなかつたものの、草稿が存在した。また、一部有能な一高生の手で演説の詳細な内容と、学校側が行つた全学集会の模様を、日記に書き留められていたのである。その代表格は、井川恭(のちの法哲学者恒藤恭)の日記『向陵記』の記事である。近年、大阪市立大学大学史資料室が、それを翻刻している。

蘆花演説「謀叛論」は、幸徳らの処刑後わずか一週間後に行われた。河上丈太郎・河合榮治郎ら弁論部主催のこの催しは、前年、一九一〇年入学のフレッシュマン歓迎の意味の込められた集会である。それゆえ多くの新入生が進んで参加することになる。文献上確認できた新入生は、井川恭・矢内原忠雄・石田幹之助・三溝又三・松岡謙・成瀬正一・菊池寛・久米正雄らである。未だ文献上の確認は出来ないものの、わたしはこれらの学友と親しかった芥川龍之介も当然出席するか、『萬朝報』での報道や級友の話で、ある程度の内容を知つていたとしたい。

井川恭は蘆花の演説を聴いた夜に、演説内容を日記に忠実に再現した。それは草稿以上に当日の演説に近いものだった。草稿に見られない蘆花の思いが溢れた箇所もあり、臨場感に満ち、従来の回想記をはるかに超える重みがある。「幸徳君ハ死んでゐる。生きてゐるのである。武蔵野の片隅にひるねをむさぼる者をこゝに立たしめたではありませんか」などと蘆花が叫んだことも記される。他方、成瀬正一は一年半後の一九一

二(明治四五)年七月十九日の日記に、「私は幸徳に同情する。彼の心はよかつた。然し不幸にして多くの非幸徳者の悪む所となり、少数の人の幸福の為に犠牲になつたのだ。法律なんかといふ妙な道具の為に」と蘆花演説を通しての感想を記す。三日後の全学集会に関しては、森田浩一の日記が詳しい。森田は新渡戸稲造校長の蘆花演説にまどわされぬようという訓話後の十時からの授業に対し、誰かが「思想が混乱している中は授業などはやつても駄目ですから休みにしてください」と発言した教室風景まで伝える。

蘆花の演説「謀叛論」は、以後、時代権力への反逆の水脈となつていく。演説を聴いた一高新入生のばあい、恒藤恭は一九三三(昭和八)年の京大事件を闘い抜き、戦後は大阪市立大学初代学長として理想の学園を築く一方で、憲法擁護と平和への提言を行つた。その「正義感と不屈の節操」(末川博)の淵源は、一高時代に接した「謀叛論」にあつた。矢内原忠雄の戦中から戦後にかけての時の権力に対峙した気骨ある対応も、また蘆花の演説と無縁ではない。わたしは芥川龍之介の一九一五(大正四)年発表の「羅生門」に見られる謀叛の精神ですら、「謀

「叛論」の影響を無視しては語れないのである。

再説するが、わたしは蘆花の「謀叛論」が、いかに大きな影響を当時の一高生と、聴きに来た他校の生徒にも与えたものであったかを考え続けてきた。そのための資料の発掘にも長年関わってきた。この場合もつとも有効な資料は、蘆花の講演の感想を率直に記した日記であった。言論の自由がなかった時代ゆえに、「謀叛論」に共鳴したような論文は期待しようがないからである。しかも、日記なら比較的真相に近い感想を見出せるからだ。

わたしが長年研究している芥川龍之介には、今もって「謀叛論」に言及した論や感想は見出せない。それゆえ多くの芥川研究家は、一高時代の芥川を論じても、同時代の芥川の習作を論じても「謀叛論」の影を読もうとしない。言及がないからそこまで入れないというわけである。それが研究者のモラルだと信じて疑わず、怠慢から生じる陥穽に気付かないのである。が、周辺の人々の日記は、「謀叛論」から受けた影響がいかに大きなものであったかを語る。芥川に当時の日記がなくとも、周辺の人々の日記は、同時代を生き延びた仲間間の動静や考えにも連動する。

わたしは芥川に日記や事件に言及した文章がないからこそ、周辺の人々の日記を調べ、彼らの意識から〈同時代青年と「謀叛論」〉という課題を抽出し、やがて激動の時代を迎える中で、彼らが謀叛の声を挙げるにいたるプロセスに、共通項を見出すことになる。資料が見出せないから、芥川は「謀叛論」を聴いていない、関係ないとするのは、研究とは何かを自覚したことのない人のことばだ。当人に見出せないなら周辺の人々を調べるといのが、研究のイロハ

である。そうした中でわたしは「謀叛論」が、当時の一高生にいかに大きな影響を与えていたかを見出した。詳しく知りたい方は、わたしの「蘆花と次代の青年」¹⁹⁾を読んでいただきたい。「謀叛論」そのものの内容や、彼ら若き世代への影響の詳しい検証は、それを参考にして欲しい。

さて、蘆花の「謀叛論」演説は、すぐに文部省の役人の知るところとなり、翌日二月二日には早くも新渡戸校長が文部省からの呼び出しを受けている。そして二月三日の全校集会となるのであった。これにはほとんどの生徒が出席している。恐らく出欠もったことだろう。学校側は呼び出しの効く全校生徒約一千名を午前八時三十分には校庭に集合させ、すぐ第一大教場に導き、問題の経過を説明した。講演会に出なかつた者も、級友から蘆花演説の概要は聞いていたから、欠席者はほとんどいなかった。南寮十番の矢内原忠雄の仲間も、井川恭や三溝又三や牧田弥次郎など、皆出席する。演説には出席しなかつたが、余りにその反響が凄いのを知った理科第二部甲類の森田浩一も出席した。森田の一高時代の日記は、近年『森田浩一とその時代』日記を通して見えてくるもの²⁰⁾として、福生市郷土資料室が復刻している。森田は二月二日の項に、「弁論部に徳富健次郎氏来て大いに社会主義賛成演説をやつたと云ふ。その事で明日八時半、校庭に集つて新渡戸先生の否定演説とかやるのを聞くのだ相な」とあり、二月三日の全校集会が早朝八時半から行われることを書きつけ、さらに以下のように記している。

八時半校庭に集合、すぐ倫理講堂に飛び込む。後から／＼来るので前の方は、一寸のすきも無くなつた。大沼さん(筆者注、

大沼浮藏。一高の体育教員が大声でもう少し後へ下がれとドナツタが皆きかず。前からは入れぬ様にして漸やく静まつた。さんざ待つてから校長を初め諸教員が着席、校長は演壇に上つて約一時間に渡る社会主義反対演説をやつた。我一高生徒にして少しでもコンナ説をいだかない様にと云つて壇を下りた。

同じ新渡戸演説を記録した井川恭の日記『向陵記』は、全校集会のようすにふれ、「問題は一昨日の徳富氏の演説についてである」と記し、続けて新渡戸校長の全校生に対しての訓話を感想抜きに記録している。井川恭は、以下のように記録している。「蘆花氏のされた言論についてハ責任はないが、氏を招いたのは全く吾輩一人の責任である。吾輩は客を招いておいて、あとで陰口をいふのハ潔しとせぬ所である。自分は氏の言論についての批評はこゝろみない。たゞ学校のこれに対する態度を明らかにしておきたい」と言い、「客が家風に合はぬ話をされたとき、家長たるものハ、わが子の為に誤解のないやうにさとさねばならぬ」と語つたとある。他方、忠雄の日記の記述は、以下のようなようだ。

九時より生徒一同を倫理講堂に集めて新渡戸先生の訓諭あり。勿論蘆花先生の演説に就てにして護国旗下にぞだてる我等には、過激の言語を以て思想を左右せられざるだけの冷静なる判断あるべきなり。本職は徳富氏の陰口を聞くものにあらざれども、外客が家風に異なりたる話をなして去らば、その家長たるものは、その家長に異なる旨を子弟に告ぐるは当然のつとめと信ず。而して今般の事件につきては本職は既に取るべき道を

取りたり。二三職員諸氏も責を分たんといはれしもそれにも及ばずとて之を断りたり。諸君に迷惑はかけさせぬによりて安心して勉強せられよ。而して護国旗下に育つ青年なるを思へよと。

言々莊重にして嗚咽するものあるに至る。思ふに新渡戸校長は既に進退伺を呈出せられたるならん。われらはいはば冷静なりき。決して思想動揺せるを覚えず。されど事既に文部当局の耳に入り、先生又進退伺を呈出せられし上は今後如何になりゆくかと、非常に心配される。新渡戸先生辞職の様なことはとてもなかるべく、又ありたりとせよ、僕がきかぬ、一高生がきかぬ、一高の先輩がきかぬ、どうぞ無事で納まります様に。

この日の全校集会は、一高生ひとり一人に大きな記憶となつて残つた。成瀬正一は一年半後の一九二二(明治四五)年七月一九日の日記に、「私が一年の時、徳富蘆花氏の話の後で校長が吾々生徒を講堂に集め、赤色の地に白く橄欖と柏葉及白線二條を縫いとつてある一高の護国旗をかざして、自分は教授服を着て、蘆花氏の説について誤解なき様さとされ、涙を流してかくの如くなつたのを嘆かれた時には、私は良校長、吾々一高生としての校長たるべき人と思つた」と書く。森田浩一の「浩一日記」は、蘆花の演説を聴かなかつた者にも、強い余波を与えたことにも言い及んでいる。

校長演説、続く『萬朝報』紙の報道(一九二二・二・五)などもあつて、一高生で事件を知らない者はまずおらず、ひとりそうしたことに超然としていられるような雰囲気ではなかつた。松岡譲は後年の回想記で、「其頃は特に非常に保守的なあの学校の事だから、

所謂国士的の連中も多く、それらはこの演説に後で反対の態度をとつた」と述べ、「賛成不賛成二派に分かれて至るところで議論の花が咲いた」とも書いてある。悪しき実証主義にとらわれた研究者の、創造力を欠いた言説はむなし。一高フレッシュマンの矢内原忠雄や井川恭や成瀬正一や松岡譲が聴き、大きな影響を受けた蘆花演説から、芥川龍之介もまた影響を受けていたとのわたし考証は、今や揺らぐことはない。

四 弁論部と基督教青年会

本筋に戻ろう。すでにふれたが矢内原忠雄は、入学後新人生への部活動勧誘で弓術部(弓道部)に入ったが、他に弁論部と基督教青年会にも所属した。弁論部は一高では有力な部の一つで、当時の弁論部委員は河合榮治郎・河上丈太郎・鈴木憲三の三人であった。蘆花に演説を依頼に行ったのは、河上丈太郎と鈴木憲三である。

忠雄は神戸一中時代から弁論を好んだ。副組長として皆の前で演説することもあった。また、談話大会では進んで演説を行った。一高で弁論部に加わったのも、きわめて自然であった。ただし、忠雄自身は、「私という人間はあまり弁論がすぎなわけではなく、また弁論が上手になるうという目的で、弁論部に入ったのではない。弁論部に入ればいい友達ができて、精神的な修養ができるだろうという理由で、先輩から勧められたんです」と「私の人生遍歴」で語っている。確かに当時の一高弁論部には、右の人々のほか森戸辰男・沢田廉三、そして先輩の卒業生には前田多門・鶴見祐輔、青木得

三・芦田均・金井清などがいた。こうした多士済々の弁論部に入るよう勧めたのも、神戸一中の先輩、川西實三であった。

右の「私の人生遍歴」で忠雄は、「私が一高の弁論部にいたときに自分の演説の中で、記憶しているもの一つに、「単純なる心」という題の演説がありまして、単純な心が人間として望ましいものである、最も美しいものである、人は心を単純にして生きるこゝとが幸福である、そういう趣旨の演説をしたのです」と語っている。

一高の三年間、忠雄は弁論部に所属し、すぐれた部員と交わり、精神的向上を図ることに努めた。忠雄は第十四代委員(明治四十五年)を井口孝親、稲垣長悟郎と勤めている。忠雄執筆の「弁論部史」⁽²³⁾は、四〇〇字詰原稿用紙一一八枚に及ぶ力編である。中の蘆花「謀叛論」に触れた箇所は、格調高い名文で、一年生時代に聴いた蘆花の演説を回想している。一部を引用する。

二月一日新旧委員辞任就任の大会ははしなくも天下の物議を醸しぬ。ヤスナヤポリヤナより降りて飛ばず鳴かず粕谷に田園生活をなせる徳富健次郎先生は此日五つ紋の羽織を着し豊頬黒髮真摯の風貌を壇上にはし「謀叛論」と題して水も洩さぬ大演説をなし窓にすがり壇上弁士の後方にまで踞座せる満場の聴衆をして咳嗽一つ発せしめず、演説終りて数秒始めて迅雷の如き拍手第一大教場の薄暗を破りぬ。吾人未だ嘗て斯の如き雄弁を聞かず。而かも此の演説の一端を伝へ聞ける人々は沸然責めて曰くかゝる論向陵に於てなさしむべからずと。又曰く聴衆はなにが故に起ちてその中止を要求せざりしやと。浅薄なる哉

□見や、怖るべき哉間接の誤解や。思ふに一高生徒ほど人格を尊重して静肅に演説を聞く者はあらざるべし。殊に真摯なる演説者の肉声は健美にして真摯なる一高健児の胸に最も正当に共鳴し得るなり。此を以て他に出でて演説せざる蘆花先生も我壇上には快諾して来り、頃者幸徳秋水の大逆事件判決に関する切実なる満腔の感想を述べられしなり。先生は自らその血管中に勤皇の血滔々たるを明言せり。而して国に諫臣なきを憂ふるは支那の古聖と雖も然かせざりしならんや。政府の圧迫は社会主義者を無政府主義者たらしめたりとの言は既に明治四十年の擬国会に於て向陵代議士の憂ひし処にあらずや、死刑廃止を唱へられしはこれトルストイの同じく唱ふる説にあらずや。加ふるに最後に於て事物の表面に眩せらるゝなく「健児よ希くは人格を修養したまへ」と叫ばれしにあらずや。

この一編もまた、文章家矢内原忠雄をよく語るものである。忠雄は「弁論部部史」を書いたことで、一高弁論部に大きな足跡を残したことになる。

一高には基督教青年会が存在した。校友会には所属しない任意団体である。しかし、会員の数は多かった。わたしは小著『評伝長崎太郎』²⁴⁾の口絵に、一九二二(明治四五)年五月五日、小石川植物園で撮影された会員の写真を採用した。この写真には二十七名が写っている。二十七名それぞれのフルネームは、長崎太郎が写真の裏にペンで記しているので確認できる。主な人物の名を挙げると矢内原忠雄のほか、石田三治(のちトルストイ研究者・長崎太郎(のち京都市立美術大学長)・藤森成吉(のち作家)・三谷隆信(のち外交官を経て侍従

長・宮崎龍介(のち政治家・民族主義者)らである。彼らは一高の暗い教室で集会を持つばかりか、時には小石川の植物園でも例会を持つていた。また三並良(はらみ)の家や一高裏の聖公会のテモテ教会(現存を借りて聖書研究や祈祷会を行った。矢内原忠雄日記の「一九一一(明治四四)年四月二十九日、土曜日」から、例会の模様を伺うことにする。

午後一時よりテモテ教会にて青年会例会あり。森戸、三谷(筆者注、隆正)両兄はじめ会する兄弟十五名。

各自の感話肺腑をつくもの多し。讚美歌 317, 464 胸をつく。三谷、森戸、河上兄等のいはれたること、river たる態度たるも先づ reciter たらんとする事。なきものを与へんとするの苦痛。高等学校時代の回顧——生意気なりき(河上兄)との話などいづれもわが胸をつけり。あゝ、なきものを与へんとするの苦痛、十分に受くることの出来ぬこの身！ 生意気！ 故郷の父母、天にまします父、いかなる事ありとも我等を許し、為めに泣き祈つてくださる父様！ 僕はないた、みんな泣いた、大黒さんもないた。森戸さんも苦しうだつた。河上さんも咽むせばれた。山岡君も泣なを引かれて泣かれた。——あゝ。

六時散会。今日の青年会は実際によかつた。僕は非常にありがたくあつた。愉快であつた。この頃の僕の psychology——物を与へんとする心。何か出来る何かするとの心。——これを以て神のみわざと心得て天国に入るの道と思つて居たわが果敢なさをしみじみと思つた。十分に受けることが出来ぬにどうして与へることができようか。然り、なきものを与ふるは大なる

苦痛である。又生意気である！

わがかたくななる心を打ちやぶりて十分に受け入れることを
したい。我笛吹けども躍らずとのみ言は僕の胸をつらぬく。

次章で扱うが、矢内原忠雄はやがて内村鑑三に近づく。また川西實三の紹介で「読者会」と称した集まりにも参加する。基督教青年会には、芥川龍之介や井川恭の仲間である文科の長崎太郎がいた。少し後のことになるが、一九二二(大正一一年)二月二十一日の矢内原日記に、「今日放課後より夕食の間長崎君と散歩して種々話を聞き又聞いてもらつた。長崎君は井川恭君と毎晩話して居た影響から君の信仰の変遷を語られた。即ちキリスト教的の神よりも哲学的の神となり救主としてのキリストよりも道德的完全なるキリストを見る、学ぶ、尊ぶといふ風にて、もとの清い信仰をなつかしむ風なりき。これに対する余の答は全く余の答にあらずして内村先生の御答へなりき。あゝわれも二三日前再び信仰めざめしものなるを！感謝！」とある。

同じ日の長崎日記²⁴には、「放課後に約束どほり矢内原君と上野を散歩しながら、信仰上の問答をやつた。矢内原君の熱烈な信仰、真面目な態度には、多くの尊敬をばらう」とあり、また、「父の摂理を認知して自らの罪を知り、真に自ら碎けたる霊を以て神の前に譲る時に！安心とあたたかき心！こんな風な言葉が矢内原君の口をとほして熱心に述べられた」とある。さらにこの日の長崎日記には、「自分は厚く君に礼を云つて Studies of New Testament を借りて帰つた。内村先生の所感十年を讀んで見よとすゝめられた」ともある。矢内原忠雄は一高時代に内村鑑三によって、信仰を強く自覚

するようになるのであつた。そのことは次章で詳説する。

注1 菊名寛一「病氣と人生」『精神分析』第14巻第2号、一九五六年一月一日

2 矢内原忠雄「中学の五年間」兵庫県立第一神戸中学校校友会『会誌』第37号、一九一七年五月、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。二九七ページ

3 川西實三「渡し守」『矢内原忠雄全集』月報2、一九六三年四月、のち南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克己・大塚久雄編『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—』岩波書店、一九六八年八月三日収録。二九〇三四ページ

4 矢内原伊作『矢内原忠雄伝』みすず書房、一九九八年七月二三日。五九〇六〇ページ

5 矢内原忠雄「私の人生遍歴」『嘉信』一九五八年二月二三日、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。二二七—二二八ページ

6 矢内原忠雄「おのが志望をのべて意見を求むる書」『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。七〇—七一ページ

7 竹田行之「神戸一中の「高い山」——大塚金之助、矢内原忠雄、河野与一、吉川幸次郎氏のこと——」『同窓会報』第32号、一九九二年三月一日

8 矢内原忠雄「小さいサウロ——中学時代の思い出」『嘉信』第23巻第10号、一九六〇年一〇月、のち『矢内原忠雄全集』第一七巻収録。六二一—六二二ページ

9 注2に同じ。三〇〇ページ

10 注4に同じ。一三三—一三三ページ

11 『官報』第八二三七号、一九一〇年八月五日

- 12 松岡譲「芥川のことども」第十四次『新思潮』一九四七年二月一日
- 13 大阪市立大学大学史資料室編『向陵記―恒藤恭一高時代の日記―』大阪市立大学、二〇〇三年三月三十一日
- 14 矢内原忠雄『余の尊敬する人物』岩波書店、一九四〇年五月三〇日、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。一三四―一六六ページ
- 15 芥川龍之介「水の三日」府立三中『学友会雑誌』第一六号、一九二〇年一月二十五日、のち『芥川龍之介全集』(最新版)第二二巻収録。一二一―一二八ページ
- 16 藤岡蔵六『父と子』私家版、一九八一年九月(日付なし)、一五一―一五三ページ
- 17 矢内原忠雄「人及び愛国者としての新渡戸先生」『東京女子大学同窓会月報』第4巻第1号、一九三八年二月、のち『矢内原忠雄全集』第二四巻収録。六八八ページ
- 18 注13に同じ
- 19 関口安義「蘆花と次代の青年―「謀叛論」をめぐる―」『文教大学国文』第33号、のち『芥川龍之介 永遠の求道者』洋々社、二〇〇五年五月二〇日収録。六三―八九ページ
- 20 福生市郷土資料室編『森田浩一とその時代―日記を通して見えてくるもの―』福生市教育委員会、二〇〇一年一月二十五日
- 21 松岡譲「蘆花の演説」『政界往来』一九五四年一月一日、のち『漱石の印税帖』朝日新聞社、一九五五年八月五日収録。一〇一ページ
- 22 矢内原忠雄「私の人生遍歴―NHK「人生読本」―」『人生と自然』東京大学出版会、一九六〇年一月二十五日、のち『矢内原忠雄全集』第二六巻収録。二二八―二二九ページ
- 23 矢内原忠雄「弁論部部史」『向陵誌』第一高等学校寄宿寮、一九一三年六月一日、のち『矢内原忠雄全集』第二七巻収録。一三九―一九八ページ
- 24 長崎太郎の一高時代の日記は、「歩」と題され、大学ノートに記録。その一部は、関口安義著『評伝長崎太郎』日本エディタースクール出版部、二〇一〇年一月二〇日に援用されている。